

神戸の女 東京の女

武田 繁太郎
え・横 塚 繁



本誌に連載した「兵庫の女」（かいしよ女）の出版記念会に、東京から、画家の横塚繁、文芸春秋の尾関栄のご両人が、横塚画伯の愛車でかけつけてくれた。

横塚君は神戸生まれなので、しょっちゅう東京・神戸間を往復しているが、尾関君はまだ一、二度しかきていないので、ほとんど神戸の街を知らない。

その彼が、小半日、独りで三宮から元町辺を散歩して、夕刻、ぼくたちに会うなり、開口一番、

「神戸の女性はいいなあ、」

と、いかにも感にたえぬようにいって、ぼくたちを驚かせた。

彼は、文春内で若い社員から「鬼軍曹」などとかわがられているほどの硬派である。この硬派の口から、神戸の印象を語るに、真っ先に女性讚美の声がとびだそうとは、ぼくたちには思いもよらぬことであった。

「すてきな神戸ムスメでもハントしたのか」

ぼくがからかい半分にたずねると、彼はあわてて首をふった。

「そうじゃないよ。断じてそうじゃないが、しかし、いいと思ったよ」

「どこがそんなにいいと思ったんだ？」

「いいんだ。東京の女性なんかより、文句なしにいい」
口下手で、お世辞のいえぬ男だが、こういう実感をこめたい方は、妙に説得力を持っている。彼は、硬派は硬派だが、商売柄、夜な夜な銀座や新宿に出没して「東京の女」を見る目は肥えているはずである。その彼が「神戸の女性はいいなあ、」

と、感嘆おくあたわずといった調子だったのだから、彼の目には、「神戸の女」は「東京の女」とくらべて、よっぽどすてきに写ったのであろう。

しかし、彼がきわめて断定的に力説するほど、「東京の女」は、「神戸の女」よりそんなに見劣りしているのだろうか。

例外はうんとある。東京にも、神戸に負けんほどすて

きな女性にはワンサという。だが、一般的、平均的にならして申せば、ぼくなども、やはり、尾関説に同調せざるをえない。

これは、女性にかぎらない。いろんな意味で、東京は加速度的にダメな街になりつつあるのである。

人間が一千万以上にもふくれあがってしまった東京では、おそらく住民の九割以上が、地方からの出身者で構成されているだろう。必然的に、東京じゅう、銀座も新宿も、赤坂も六本木も、すべてこれらの地方出の「イナカ者」でハンランしていることに相成る。

昔は、「イナカ者」が東京にでてくると、じつに肩身の狭い思いをしたものである。それが、いまではアベコベだ。「イナカ者」が大手をふって東京じゅうを闊歩している。東京は「イナカ者」に完全占拠されてしまった。いや、東京そのものが「イナカ」になってしまったのである。

断っておくが、ぼくは、こういう「イナカ者」をバカにしているのではない。早い話が、ぼく自身、三十年まえに生まれ故郷の神戸から、ノコノコ上京していった「イナカ者」の一人だったのである。

しかし「イナカ」には「イナカ」のよさがある。「イナカ」独特の魅力がある。せんだって、ぼくは東北旅行をして、宮城、山形、岩手、秋田の四県をまわってきた。仙台市、山形市、秋田市などの都会をはじめ、芭蕉の「奥の細道」の跡を訪ねたので、コースにあたるひなびた村や町も歩いてみた。

秋田や山形などの裏日本は、評判どおりに美人が多かった。まだ十代の女子高校生などでも、はつと目を見はるような「明眸皓齒」の持主がめずらしくなかった。一週間の東北の旅で、ぼくはたっぷり目の保養をさせてもらった。

しかし、たとえば、ぼくに、はつと目を見はらされた「明眸皓齒」の女子高校生でも、もし東京にでてきて、B G勤めでもすれば、どう変貌していくか。おそらく半

年か一年で、本人は結構東京風にアカ抜けしたと思いついていても、ほんとうは、「明眸皓齒」も都会のアカによかれ、へんに東京づれしているだけで、ぼくをがっかりさせるにちがいない。地方出の女性の大部分が、こういう末路をたどっているのである。

たとえば、黒ペンキに白ペンキをまぜてかきまわせば、どんな色になるか。それは、もう白でもない、黒でもない、白のよさも黒のよさも失われた、きたない混濁した灰色に変わってしまうだろう。地方出の女性が東京に住めば、彼女の持っていた地方独特のよさは失われ、そういう女性がハンランすることによって、逆に、東京そのもののよさも失われてしまう。東京が彼女たちをダメにし、ダメにされた彼女たちが、さらに東京をダメにしていって、そういう悪循環が、加速度的にこの東京で発生しているのである。

新宿のさるバーのママが、いみじくもぼくにこう述べたものである。

「このごろのコって、それでも女かといいたくなるようなのが、大きな顔してホステスになってるわね。こっちは人手不足だから、泣く泣く使ってるけど、もうこういう商売がつくづくいやになったわ」

それで、いちばんバカをみているのが客であることには、このママは気づいていなかった。こっちが泣きたくなる話である。

都会の地方化現象は、いわば時代の流れである。神戸たりとも、その例外ではありえないだろう。しかし、一つの街に一千万以上もの人間がひしめきあっているような街は、もうマトモな街と呼ぶことはできない。それはおそろしく没個性的で、無秩序と喧噪のルツボ以外のなにものでもない。

食いのものも、特殊な例を除いて、東京の一般庶民の食生活は、いまやサンタンたる状態になりつつある。関西から転動してきたサラリーマン家族のいちばんの嘆きは「東京で、なんでこう食いのんがまずいんやろ? 食う



もん、あらへんやないか」

ということである。彼らは東京に住んでみて、始めて、関西が食いもんの天国だったことを、しみじみと思いい知らされるのである。

「食べもののうまい街というのは、せいぜい人口が百万程度までだな。何百万もの大都会になると、もううまいものはみんなの口にはいらなくなる」

これは、神戸育ちの田宮虎彦氏の述懐である。たしかに、東京のようなバケモノじみた超大都市では、食いのものは、味のよしあしなどいってはおれない。なんでもかでも、ともかく、一千万個の胃袋をみたしてやるだけで、精一杯である。一般庶民が、日々の食生活で、すこしは気のきいた食いのを口にしたいと願っても、もはや絶望というほかはない。

しかし、田宮虎彦氏の「人口百万限度」説は、食いものだけではなない。住宅でも、交通でも、都市公害でも、そっくりそのまま当てはまるだろう。

「こんな東京にだれがした？」

とくやんでも、もうおそい。一時「東京砂漠」という言葉がはやった。流行語は消えたが、砂漠そのものは、一刻のやすみもなく、東京を浸食しつづけている。こういう荒涼とした砂漠のなから、

「神戸の女性はいいなあ」

と、尾関栄さして感嘆せしめたとおなじ程度に、

「東京の女性はいいなあ」

といわせるほどすてきな女性が、どの街を歩いていても、ふと、ゆきずりに会えるほど、発生するだろうか。

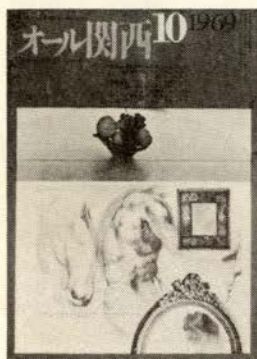
だが、こういう砂漠化現象は、東京だけではない。全国の地方都市にも波及しつつある。悪口になって申しわけないが、札幌なども、へんに「スモール東京」化に浮身をやつしだしたため、札幌本来のよさが失われつつある。

「このごろの札幌は、なんとなく魅力がなくなってきたなあ」

★関西の情報雑誌★

オール関西

1月号予告



特集 関西の経済人100人

★新春対談 岡本太郎—吉原治良

★万国博現地レポート 邦光史郎

好嵐対話／石橋登—高田好嵐

商売の最前線 京都国際ホテル支配人・木村 博

ヨーロッパ吟行の旅

赤尾兜子・伊丹三樹彦・北さとみ・眉村 卓

小説「十六夜」黒部 享

★好評連載企画

名作の中の関西・大谷晃一／画家との一時間

ボンソワール・マダム

・松浦直己のヨーロッパの文学紀行

・世界のビジネス旅行

・グループ登場

コラム／マスコミ探点簿・経済・科学・音楽・美術
万博の動き

関西のすべてをガイドするタウンカレンダー

ゴルフ帳麻雀帳競馬／神戸ショッピングガイド

神戸百店会ガイド／ニューショップガイド

と、札幌へ出張してきた連中がしゃべっている言葉を札幌の市民たちはケンキョにきいてほしいものである。ぼくは寡聞にして、神戸に「××銀座」と名づけた街のあることを知らない。たぶん、ないのだろう。いいことである。うれしいことである。そこに、ぼくは、「神戸っ子」の自信と心意気を感じる。そして、そういう自信と心意気のなから、東京人の尾関米をして、「神戸の女性は、いいなあ」と、感嘆せしめたすてきな女性たちが生まれてきているにちがいないと思うのである。

東京人の尾関は、欠食児童みたいなのに、ガツガツと、「ハイウェイ」のデキを食い、「青辰」のアナゴずしを食い、「蛸の壺」の灘の生一本を呑み、「元町バザー」でネクタイを買い、「セリザワ」でセーターを買い、帰りがけに、「フロインドリーブ」でケーキとパンをしこたま買いこみ、ホクホク顔で「東京砂漠」へ引揚げていった。

彼がイソイソとショッピングをたのしんでいるあいだ、相棒の横塚画伯は、完全にはくたちのまえから行方不明になってしまった。

心細くなった尾関が、アチコチに電話した揚句、やっと、横塚画伯の潜伏先き突きとめることができた。だが、尾関は、送受器をおくなり、ぼくにいった。「神戸の女性って、いい声をしとるなあ」と、どうやらこれで、ぼくにも、電話の応待にでた主の正体が読めた。

神戸の女性のよさを、身をもって知っているのは、やはり、神戸育ちの横塚画伯だったのかも知れない。

★二月号より

武田繁太郎氏の

新連載小説が

横塚繁画伯（二紀念）の

さし絵で始まります。



ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目 TEL ☎ 7290



選びぬかれた
ブレタポルテ
オーダーシャツ
リゾートウエアは
世界の名品を

紳士洋品の店

千穂庵

元町店 TEL34-6959

メトロ店 TEL34-0550



Mr. Kent
came to Kobe
流行に左右されない
本来のオシャレ
それがKentです
シックな
スコッチ風の店舗
それがFunakiyaです

Kent shop

フナキヤ

元町3 TEL<33>3617

高級紳士服専門店

神戸テラー



さんちかメンズタウン TEL ☎ 0388
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL ☎ 2817・3173

V 創作ハンドバッグ
工芸品 ORIGINAL

神戸 ■ 元町

ACCESSORIES

イクシマヤ

TEL. (33) 2415・2416



洋服店

婦人服飾
と
お誂え専門店

コマツヤ

三宮センター街2丁目

TEL. 331833398809

さんちか(ファミリータウン)

TEL. 395217

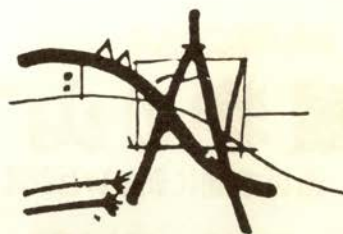
謹 賀 新 年



舶来雑貨 **≡ // ^**

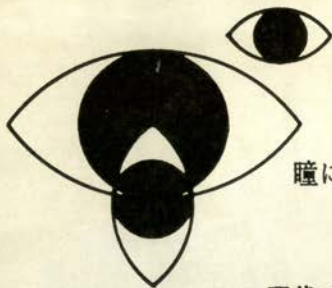
元町店 元町2丁目 TEL 33-4707~8
そごう店 特選サロン サノヘコーナー

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末 積 製 額

三宮・大丸北
トア・ロード
331309・6234

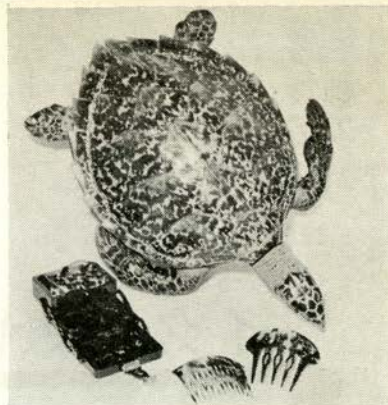


瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

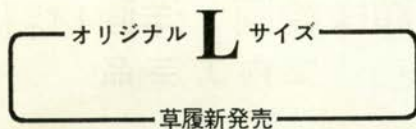
日本コンタクトレンズ協会会員

国際コンタクトレンズ研究所

神戸市東灘区御幸通八丁目九ノ一（三宮駅前）
神戸国際会館内 TEL (22) 8161・(23) 2570



新装開店 **太田 鼈甲店**
センスあふれる
ベッ甲専門店 元町1丁目 TEL ㉓ 6195



創業明治二十八年

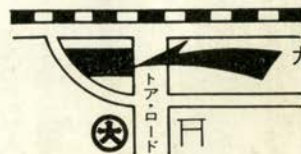
履物の山下

古い老舗に新しいセンス

确实正札 完全冷暖房
静かに品選びの出来る店
神戸三宮センター街 TEL (39) 0256

■インテリアデコレーション

合鍵と錠前



カギヤ
金物店

カギ屋金物店

KOBE 三宮・トア・ロード ㉓ 0193・6507
OSAKA 心斎橋そごう地下一階

The
Cosmopolitan
Valentine F. Morozoff

コスモポリタン
チョコレート・キャンデー

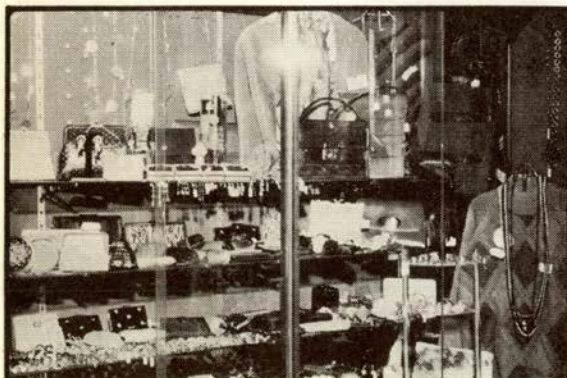
神戸本社	神戸市生田区三宮町1丁目170	電話 33-5304
神戸直売店	神戸市生田区三宮町1丁目	電話 33-1217
大阪堺筋店	大阪市東区淡路町2丁目	電話231-6979
大阪心斎橋店	大阪市南区安堂寺橋通4丁目	電話251-4182
東京銀座店	東京都中央区銀座8丁目	電話571-2303
東京新宿店	東京都新宿区角宮1丁目	電話352-2436
	新宿ステーションビル地下2階	
東京国際ビル店	東京都丸ノ内 国際ビル	電話212-3746

あけまして
おめでとう
ございます

今年もやっぱり
おもちゃは
カメヤ



三宮方面での さんちか店 三宮店 元町方面での 元町店 パンプウ店	お買物は……… ファミリータウン センター街大洋劇場東隣 お買物は……… 元町通3丁目山側 元町通1丁目不二家前	33-4045 33-4969 33-0090 33-0768
--	---	--



アクセサリ-の店

神戸大丸前
TEL(39)9719



お歳暮に

のれんが育てた
神戸の味

瓦せんべい
クリームパセヨ

亀の井龜井堂本家

神戸三宮 トーア ロード
本店 33-0001
電話 南店 33-1616
さんちかスイーツタウン
電話 33-6532

神戸っ子のみんなに愛される落ちついた喫茶店



ai

喫茶 愛

TEA ROOM

★神戸・元町本通元一ビル2階 TEL (32) 0958

おすし
てんぷら

栄 彌



本店 大丸前・三宮神社東
TEL 33 5 5 7 7
支店 さんちか味ののれん街
TEL 39 5 2 3 3
(毎週水曜日休み)

営業時間
A.M. 11.30~P.M. 9.



スタンド 千里

東門筋東神ビル地階
TEL 33-4730

でんわ・
232333 一三七七一
一〇六三三
六三三
五

三宮
ムサシ

やっぱりうまい
むさしのとんかつ

ヤッカチェーン




古きヨーロッパ Drink Stand
ムードの
石垣と
ステンドグラスの
ある店


YAMANO
TEL (33) 9090
サンザンクレクレ

ヤッカチェーン

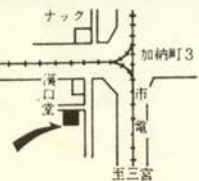
Snack and Drink




DOGA 白榆で囲まれた
ドガ 北欧ムード
TEL 33-4560 お二人づれの店



JAZZ BOX
Candy
神戸市生田区加納町3丁目2
TEL 33-3371




山の手 SNACK
YAMANOTE
神戸市生田区中山手1丁目
ソネビル TEL 22-3637



連載小説 〈V〉

夏の別れ

石浜みかる
え・石阪春生



夏休みがあげた翌日、実力考査があった。その日、松木は山本に用があったらしく、私たちの教室へ顔を出した。話の済んだあと、山本が私のそばへきて、松木が呼んでいると告げた。こちらを見ている筆子を意識しながら、私は廊下へ出た。

「今日の午後、ちょっときいてほしいことがあるんだ。」
つとめて平静さを装っている松木の声には、かえって訴えるような響きがこもっていた。顔色も冴えなかった。疲れているのだろうか。そう思いながらも、私は、どうしたのと尋ねてみる気にはなれなかった。

「悪いけど、昨日から母の具合が悪いのよ。早く帰らなきゃいけないの。」

私の口からは、すらすらと嘘がでてきた。

「僕がどうしても、といっても？」

「——ごめんなさい。」

松木は判ったというように、いくぶん力なく頷き、自分

★前回まで 旧制中学の「質実剛健自重自治」の伝統を持った名門校に入学した城崎さち子の周りには、はや大学受験にあくせくする親友たちがいた。ある昼下り、成績掲示板の前で出会った秀才・松木清之との出会いがさち子の心を揺るがせた。

しかし、さち子は松木からの夏休みのキャンプの誘いを断わり、尾道で外国人家族と通した。洗練されたY氏の魅力に、期待と不安をおさえることができず、それは島での生活を甘くも、また若い胸に大きな衝撃ともなった。

Y氏への心の傾斜とともにY夫婦の罪悪感に対する嫌悪の情が、松木を思わせ、十日間の大人の世界をかいまみた感じで尾道を去った。そのさち子と同級生たちは、淡路へ海水浴に誘った。遠き通る淡路の海も、その中で松木たちとの戯れも、さち子にはあの島でのY氏の熱い眼差しを想いおこさせた。それでも松木についてまわる筆子は気になる存在であった。夏休みが終った。

の教室の方へもどっていった。その後姿に、私はふと自分の心が柔らぐのを感じたが、あとを追っていった、いわという程の気持にはなれなかった。私は席に戻りながら、あの十日間のことをパノラマのように思い出し、結局仕方がないじゃないのと呟いた。

数週間か数カ月、それがどの位の時間かはつきりつかめなにしても、ある時間がたてば、当面の曖昧な雰囲気と気まずさが消え、私たちは再びあのほどほどの友達に戻れるはずだと、あのときたしかに、私は判断したのだった。

成績表を朱く染めていた夕日はすっかり沈み、夕闇が辺を包みはじめていた。一週間前のあの実力考査の結果がこの成績表だった。

一番松木清之。五番秋田肇子。三十二番城崎さち子。私の成績は予想通り逆戻りしていたが、不思議に私は落胆していなかった。

運動部員もすでに去った校庭を横切り、湊川に沿って市電の通りへ出て、私はひとり電車のくるのを待った。

あの試験の日から今日までの一週間、松木は一度も私の前に現れなかった。だから、今朝、授業の始まる前、山本が、

「城崎さん。やつが昨夕から行方不明だ。」

というまで、松木に私の中の変化を読みとる敏感さと、その事態を冷静に受けとめる分別とがあり、しばらく会うことをやめたのだと、私は解釈していたのだ。

一週間前、すらすらとついた嘘、その重みを私は軽く見すぎていたのだろうか。あのとき松木は、私にいった何をきいてはしかったのだろう。それとも今度の事件は、そんなこととは関係のない、彼の世界の中のことに過ぎなかったのだろうか。

今朝、教科書の上に落ちた熱い涙、それはつまるところ、愛の魅りなどではなかったのだ。あれは、今度の事件に関して、私にも一端の責任があったのではないかという、漠然とした不安——そんなものであったらしい。私は、そう気付いたのか、そう思い込もうとしているのか、実のところ自分でもよくは判らなかった。

「やつ、昨夕、見つかったぞ」

教室へ入るなり、山本が囁きつくように低く、はつきりと区切っていた。私は松木が生きて発見されたことを知った。睡眠薬だったという。

松木は、朦朧と覚醒きりぎりのところで自ら救いを求め、T山からなびらかに続くM海岸の漁師の家の戸をたたいたのだという。

彼が散歩に行くといって出かけ、死のうとして失敗した場所がT山であるときいたとき、私はもう、彼が試みた一切のことがありありと判るように思えた。

あの山には、私の苦しい思い出がつかまっている。それは私の記憶に残る唯一の無気力からの脱出行為であった。原因はもう受験勉強に飽きたという、しごく些細なことだった。

はじめ、母は、私の最初で唯一の恋愛事件のときと同じように、窺うような甘い声で、私をなだめたりすかしたりしていたが、やがて、開き直ったように、

「いったい誰のために、おとうさんやおかあさんは、一生懸命働いていると、あなたは思っているのよ。」と、おどしはじめた。

「こんな時代に、子供なんか生むからよ。」

勉強というものを始めていらい、鬱積していたものをまとめて吐きだすように、私はその言葉を口にした。一瞬つまった母は、それでも、

「あなたなんか生まなければよかった。」

と能面のように無表情な顔で切返してきた。

私も母をゆきづりの他人のように眺め、黙って家を出た。

なぜかためらいもせず薬局へ行った。疑われないようにつとめてさきげなく振舞いながら、どうもよく眠れないからという分けをする私に、店の主人は無表情に薬を差し出した。心配するとまずいからと、背のびした思案をした自分が滑稽なほど、それは簡単至極なことだった。

あの時も、夏の夕暮れの照りつけは烈しく、店を出るとき、私はじっとりと汗をかき、前よりも一段と深い疲

労感に捉えられていた。

私は丁山の人に踏み慣らされて自然にできた細道や、くねくねと曲った険しい道を無茶苦茶に歩きまわった。そして谷間の大木の下に積っている湿った枯葉に腰をおろした。海辺のごみごみと重なり合った、薄汚ない民家の屋根が、木々の間に見え隠れした。乱立するテレビのアンテナは夕陽を照り返し、触手のように輝いていた。私の死も発見されれば、あの金属の棒に捉まれ、一瞬後にはもう誰れの記憶からも消えてしまうのだろう。私は葉とジュースの缶を弄んだ。頭の中には、両親のことはほとんど浮ばず、ただ発見されないのは寂しい、しかし、腐爛状態でみつかるくらいなら発見されない方がまだ良い、というようなとりとめのない思いが何度も同じように浮んでは消えていった。

再び眼をあげたとき、景色は消え去っており、海岸を走る車のヘッドライトの洪水が、押し寄せてきては突然

闇に消えた。その闇からは、テールランプの赤い列が遠くへのびていた。

静寂の中のその赤い光が心の均衡を崩し、片隅にひそんでいた無力なものに、再び芽をふく力を与えてしまったのだ。その上、夜空の星のきらめきが、その芽に養分を与えてしまった。青白い月でも出ていけば、すべてはうまく行ったかもしれないにと、妙な理屈を自分にいい聞かせながら、私は無気力のまま戦線に復帰していったのだ。葉を一滴も飲まなかったジュースの缶をそこに置いて、私は、こんな女に何の気兼ねがいるものかと、抹殺を決意していた日常性の中の自分自身の元へ、とほとと不様に帰って行った。そして翌日から、私の生活はいつものように始まった。なにひとつ変りはしなかった。

松木も、あの突然消え突然湧きあがるヘッドライトやテールランプを、その朦朧とした眼で捉えたのではなかっただろうか。

彼はこの時代を、いや、どんな時代でも、鮮かに通り抜けていく人間だと私は信じていた。白豚の肥満もキリギリスの蒼白さもない肉体。成績表に毎回入り乱れる二番以下から、超然として人格の記号化を許さない頭脳。皆に代って生徒会長という無駄な努力を敢えて引き受けようという俠気に富んだともいえる性格。

その松木がいったい何を考えたのだろうか。ただ、鮮かに一切を打ち切ろうとして、ひどく不器用な結果に終わったことは事実で



あった。可哀そうに、と私は思った。

可哀そうに。……そう、松木の良さをすべて認めながらも、そのとき私に示せたのは、その言葉の表す精いっぱい同情的だった。

当然のことながら、松木の出でくるまでの一週間、生徒の間ではひそかに、そしていつからか公然と噂が飛ぶようになった。

失恋らしい。夏休みの終りに調子子が婦人科の門を潜るのを見た。そういえば、あの二人を休暇中よく生徒会室でみかけた。いや、松木は執行部の仕事と勉強の両立に悩んでいたらしい。それにしてもは相変わらず一番をとっているではないか。本質的には無関心で、ちょっぴりの同情を底に漂わせた、若者特有の残酷さが、皆の間を行きかった。しかし、誰もほんとうのことを知ることはできなかった。

二学期が始まって以来、筆子は私に対し、あの海水浴のときのような態度を一度もみせなかった。ただ沈黙の中に冷淡にならない程度の敵愾心を燃していることだけが、私には感じられた。相変わらず私は筆子という人間を捉えかねていたが、起伏のひどく激しい性格の持ち主で

あることだけは判り始めていた。

筆子は松木をふりまわしたのではないだろうか、その結果松木の心を捕え切れなかったのではないだろうか、という思いも同じに私をとらえはじめていた。しかし、噂に対し、筆子は沈黙を守り、毅然とした態度を崩さなかった。私の考えは、何の根拠もない推量でしかなかった。

また、たとえ二人の間に噂が期待していた事態が生まれていたのだとしても、いまの私には、冷静に受けとめることのできる事態、すなわちどうでもいいことになっていた。

一週間後、焦痒から充分抜けきらぬ顔で松木は登校してきた。体育祭が待ちうけており、山本を通して、彼がその準備に没頭していることを私は知った。

その打ち合わせのため私たちの教室へときどき顔を出す松木が、私の眼をとらえようとつとめていることを、私は充分承知していた。また、私の眼の中に何を見たいのかも判っていた。が、私はそんな松木の眼をのがれ続けたので、体育祭の前日まで、二人が口をきく機会はやがてなかった。

△続く▽

★神戸の催物ごあんない★ 1月

＜音楽＞ ★フォーク・ステップ・ヤング

1月12日(月) PM4:30 7:00 神戸国際会館

出演/「或る日突然」のトワ・エ・モア「花とおじさん」の伊東きよ子「あなたが欲しい」のハブニングス・フォー
S¥800 A¥600 (全館指定席) B¥450 (2階自由席)
神戸新聞会館主催

★舟木一夫ショー 民音1月例会 会費¥650
1月13日(火) PM2:00 6:30 神戸国際会館

★デューク・エリントン楽団

1月16日(金) PM6:30 神戸国際会館
レパートリー/「ザ・ムーヴ」 「フラミンゴ」ほか
民音1月例会 A¥1400 B¥1000

★越路吹雪リサイタル

1月18・19日 PM6:30 神戸国際会館
S¥2500 A¥2000 B¥1500 C¥1000

★菅原洋一のすべて 神戸労音1月例会 会費¥750

1月20日(火) PM6:30 神戸国際会館

★日本フィルハーモニー交響楽団

1月21日(水) PM6:30 神戸国際会館
指揮/小沢征爾 チャイコフスキー交響曲第5番短調 他
S¥1800 A¥1500 B¥1200 C¥800

★パッパ・プリステン 神戸労音1月例会

1月28日水 PM6:30 神戸国際会館
演奏曲目/管弦楽組曲 第2番 ロ短調、ブランドンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 (その他)

★エリザベート・シュワルスコップ独唱会

1月29日(木) PM6:30 神戸国際会館
曲目/シューベルト「春に」ワーグナー「夢」その他
S¥2800 A¥2500 B¥2000 C¥1500 D¥1000
神戸国際会館主催

＜演劇＞ ★「聖女ジャンヌ・ダルク」 神戸新聞会館主催

1月30日(金) PM6:15 神戸国際会館
出演 岸田今日子 仲谷昇 名古屋章 内田稔
S¥1500 A¥1200 B¥900 (全館指定席)

★青年座公演「夜明けに消えた」 神戸労音1月例会 会費¥550
2月5～10日 PM6:15 8日のみ PM1:30
海員会館大ホール 作/矢代静一 演出/栗山昌良
出演/森塚敏 中台洋浩 大塚国夫 平田守 初井言栄(他)

＜演芸＞ ★初笑い寄席名人大会

1月1～8日 PM12:00・4:30 神戸国際会館
出演/京唄子・鳳啓介 フラワーショウ いとし・こいし
入場料/指定席¥500 自由席¥350 (前売¥300)

★仁鶴リサイタル

1月25日(日) PM2:30・6:30 神戸国際会館
友情出演/やすし・きよし 洋介・喜多代(他)
S¥550 (指定席) A¥400 (自由席)

愛読者
サロン



★この間、「神戸っ子」という雑誌を友人が見ていたので興味をわいてきたので読み終った後、家に持ち帰り読みました。今まで、何げなしに三ノ宮や元町へショッピングに出かけていましたが、この「神戸っ子」を読んでからはショッピングをするにも自分のセンスにあった商品が多く揃っているのでもっと早く簡単に買物ができ、とても楽しくなります。ペラのドリルキング地図を元にしてゆっくりと食事。と、有意義な一日を過ごせることができました。これからますます、よき神戸っ子住民の人間ある雑誌として今年も頑張って下さい。

▲垂水 高校生

発行にいろいろお世話いただいた方がた

柏嘉嘉大小岡岡岡牛上榎石井乾砂青荒浅朝安
井納納井淵野根崎部崎尾田並野上野野木木田部
健毅正元ツ一真伊真吉将正成文左信豊重長正
一六治彦ム夫造忠子一朗雄一明門一彦仁雄晃平隆夫

玉田田田田滝滝竹角砂塩新白雀阪阪古後上小小小
井中中村宮川川中南田路谷川部口本林藤林林泉林磯

健寛孝虎勝清 猛重義秀 昌干 喜末英秀徳芳良
操郎次介彦二一郁夫民孝雄渥介雄勝楽二一雄一夫平

神行山若百村宮松福深原畑原野南中中西直外竹津
青吉口杉崎上地崎井富水 口沢部西巻脇木島馬高
年戦泰 辰正裏辰高芳惣泰 専忠幸主 太健準和
議所女弘慧雄郎二雄男美吉良 郎郎郎三勝親観郎吉助一

後編
記集



★新年あけましておめでとうございます。

▲編集部一同

★一九七〇年代を迎えました。さてこの新しい年代に日本は、神戸は、神戸っ子はどう発展するか？
一番大切なことは、日本人として神戸市民として、神戸っ子編集部として、責任ある態度で未来に望みたいということ。ホモ・モベンスなる新語が生まれるときに、現代人としての行動力もそなえて、この新しい年代にアタックしたいと思えます。
▲小泉康夫

★長崎市の観光客へのでもなしの香港オーシャンタミナルの立派さに、ミナト神戸よボヤボヤしてたらアカン！という感を強くしました。キャンベラ号の合理的かつスマートなサービスぶりにも脱帽。万博を迎えて、神戸も旅人へのエチケットと

神戸っ子ごあんない



★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れているお友達に、神戸の香りをおとけにしたい方は、編集部あてにお申込み下さい。さっそくお送りいたします。

6カ月分 六五〇円

1年分 一三〇〇円(送料共)

●月刊神戸っ子に紹介されている、神戸の銘店には、お客さまへのサービスとして神戸っ子がおかれてい

●月刊の神戸っ子をお買求めの時には左の本屋さんへどうぞ。
コウベックス さんちかタウン 漢口堂三宮店 京町筋

親切を充分心得たいものですね。そして、若ものよ海へ出よう！海は新鮮な発想の源です。▲小泉美喜子

★機械文明が発達し、人間が機械の奴隷となるのではないかと、危機感を感じるところに人間の偉大さがある。情報産業からでる言葉が硬質であるだけ、日本本来の文字の美しさが眼にみえる今日だ。▲岡本邦彦

★淀川さんより送られてくる「シネマ」の原稿写真。全部掲載もあって割愛を余儀なくされる「クボヨシコ」★コンビニータ座談会。録音テープから文字を拾いながら、声を文字に書きとる携帯用装置の普及を心から願うのであります。▲高田明子

★回をかきわけてきた「高校野球の思い出」も、本号をもって最終回、次号から弓銃バウガンを取りあげます。ご好読下さい！▲ながおこうじ

★編集部議が終了した後、「ボケジャをお願いします」といつもの調子で皆にお願いした。期限に間に合っ

●月刊神戸っ子に広告を掲載したい方は、また商品をご紹介なさりたい方は、月刊神戸っ子編集部へお申し込みください。
●神戸百貨店の事務局も月刊神戸っ子編集部内にあります。

神戸っ子NO. 105
*発行/昭和45年1月1日
*編集/昭和/小泉康夫
*発行所/神戸っ子編集部
神戸市葦合区八幡通5ノ96
K・Eビル4階
電話②7037・8072
頒価・100円